

韓米が新作戦計画に署名 北の大量破壊兵器除去に重点

2015/08/27 聯合ニュース 384文字

【ソウル聯合ニュース】韓米両軍当局が有事の際に適用する新たな作戦計画をまとめ、今年6月に署名していたことが27日、分かった。韓国軍関係者が明らかにした。

同計画は北朝鮮の核・ミサイル・生物化学兵器など大量破壊兵器の攻撃的除去に重点を置き、有事の際に先制攻撃する概念が適用されたもようだ。

韓米両国は2010年10月の韓米定例安保協議(SCM)で北朝鮮の脅威や戦略状況の変化に総合的に対応できる新たな作戦計画を樹立するため、「戦略企画指針(SPG)」をまとめ署名した。

北朝鮮の大量破壊兵器を攻撃的に除去する概念は同計画の基盤になるもので、既に韓米両軍の作戦に適用されている。

17日から28日まで実施中の韓米の定例合同軍事演習「乙支フリーダムガーディアン」(UFG)でも、同計画に反映されている北朝鮮の生物化学兵器の脅威および対応手順を適用し訓練を進めるとされる。

韓半島有事、韓国軍の新「防御・反撃」作戦計画の中身とは

2015/10/07 朝鮮日報 2016文字

北朝鮮による全面戦および局地挑発に備えた新たな韓米連合作戦計画、「作戦計画(OPLAN)5015」を実行する韓米合同演習を、2017年から韓国軍主導で実施するのに伴い、OPLAN5015が注目を集めている

OPLAN5015は、韓国軍の崔潤喜(チェ・ユンヒ)合同参謀本部(合参)議長とスカパロッティ韓米連合同司令官が今年6月に署名したことで発効した、新しい作戦計画だ。1970年代以降、全面戦に備えた韓米合同作戦計画としては「OPLAN5027」が代表的だったが、OPLAN5015がこれを代替することになった。OPLAN5015は、もともと今年12月に戦時作戦統制権(統制権)が韓国軍へ移管される場合に備え、2007年から韓米両軍が一緒に作業してきたものだ。当初の計画では、統制権を移管した後、「韓国軍主導、米軍支援」という枠組みで作戦計画が作られる予定だった。しかし昨年10月、韓米の国防長官会談で統制権移管が事実上無期限延期されたのに伴い、従来のOPLAN5027と同様、韓米連合同司令部が主導する形でOPLAN5015が作られた。

OPLAN5015の内容は2級秘密のため、韓国軍当局はこれについて徹底して口を閉ざしている。今年8月末、この計画が一部メディアで報じられた後、スカパロッティ司令官が崔議長に強く抗議し、機務司令部(韓国軍の情報部隊)などで保安調査が行われている。国会国防委員会は、合参に対してOPLAN5015に関する報告を何度も要求し、当初は今年5日に報告がなされる予定だったが、合参はOPLAN5015の内容ではなく軍事的に備えている態勢だけを報告するなど、国会と軍当局との間で神経戦も続いている

消息筋によると、OPLAN5015はOPLAN5027に比べ、有事における韓国側の被害をできる限り減らしつつ、いわゆる「斬首作戦」など、北朝鮮政権首脳部に対する精密攻撃で早期に勝利することを目標にしている点が最大の特徴だ。

従来のOPLAN5027は、北朝鮮が全面戦挑発を行った場合、しばらくは防御に重点を置き、開戦から90日以内に大規模な米増援軍が韓半島(朝鮮半島)へ派遣された後、ようやく本格的な北進を

行って北朝鮮の政権を倒すことになっている。計画の上では、米増援軍の規模は兵力69万人、空母打撃群5個をはじめ艦艇約160隻、航空機約1600機などとなっている。しかしこれには、二つの大きな問題があった。増援軍到着まで3カ月間、韓国の地域が大きな被害を受ける可能性が高く、またそれほど多くの米軍の兵力や装備が、果たして実際に韓半島へ派遣され得るのかという点だ。韓国軍の関係者らは「OPLAN5027の通りなら、韓国が勝つにしても『廃墟の中の勝利』になるほかないというのが問題だった」と語った。

このためOPLAN5015では、北朝鮮が南侵した場合、大規模な米増援軍が来る前であっても、在日米軍などの空母・戦闘機・原子力潜水艦・海兵隊などから支援を受け、直ちに反撃するようにしたという。ここには、北朝鮮の政権や軍の頭脳、心臓、中枢神経を破壊、またはずたずたに断って無力化する、「効果に基づいた作戦(EBO)」という概念も導入された。北朝鮮の弾道ミサイル発射が迫っている兆候があれば先んじてたたくという先制打撃の概念は、OPLAN5027の最新モデルにも一部導入されたが、OPLAN5015ではより積極的に反映されたという。

特に、有事の際に核兵器使用を決心しかねない金正恩(キム・ジョンウン)朝鮮労働党第1書記はじめ北朝鮮の政権首脳部に対して精密打撃を行う「斬首作戦」の概念を導入し、核・ミサイル・生物化学兵器など大量破壊兵器(WMD)を早期に無力化し、戦争を可及的速やかに終わらせようとしていることも特徴の一つだ。韓国軍の特殊戦司令部(特戦司)、UDT/SEAL、米軍のデルタフォース、ネビービーシールズなど、両国の特殊部隊も特殊作戦機や潜水艦に乗って北朝鮮地域に潜入していき、こうした役割を果たすことになる。キム・ヨルス誠信女子大教授は「OPLAN5027が『防衛の後に攻撃』という概念だったとすると、OPLAN5015は『防衛と攻撃を同時にやる』というのが最大の違い」と語った。

全面戦だけでなく局地挑発に備えた計画を含んでいる点も、OPLAN5015の特徴だ。朝日新聞は今年5日、OPLAN5015は局地戦やゲリラ戦に重点を置いていると報じた。一部では、OPLAN5015には北朝鮮の内戦など事態急変に備えた計画も含まれるとみているが、韓国軍の消息筋は「含まれていない」と伝えた。このほか、OPLAN5015は、北朝鮮の核・ミサイルに対応する「キルチェーン」と韓国型ミサイル防衛(KAMD)システムの構築を前提にしているといわれ、相当なレベルの国防費増額が必要になるという見方も出ている。